埼玉大学紀要（教養学部）第49巻第１号　2013年

カナダ仏教会における語りの中の日本文化

Japanese Culture Displayed in Story Telling at Canada Buddhist Temple

福　島　三穂子*

Mihoko Fukushima

はじめに

カナダのバンクーバーにある日系人コミュニティーを対象に、コミュニティーの喪失と再生の歴史に関する語りについて考察することをこの論文の目的にする。ここでは特に、スティーブストン仏教会での日系人ガイドの語りをデータとして扱う。日系人が日本人に対して日系文化を語る時、それはどのようにして語られるのだろうか？カナダにいる日系人は、日本文化にも、カナダの文化にも強く影響を受けながら、独自の文化を確立してきた。スティーブストン仏教会はまさにその融合の現場として捉えることができる。2 つの文化の融合が起きた場所では、どこまでが日本文化なのか、どこからが日系文化なのか、更にはどこからがカナダの文化なのか、という複雑な線引きが語りの中で行われながら、日系人のガイドと日本人ビジターの間で、仏教会という特別な場所の理解がなされているように思われる。その様子を会話分析の手法を使って詳細に分析していきたい。

まず、日系移民の歴史の中でも、特殊な道を歩んだ日系カナダ移民の歴史に触れ、次に実際のデータを分析しながら、カナダ仏教会における語りの中の日本文化を検証していきたい。

* ふくしま・みほこ
埼玉大学教養学部非常勤講師

バンクーバーの日系人の歴史

データを見ていく前に、今回データとなっている、スティーブストン仏教会を含む、バンクーバーの歴史について少し触れたい。

図１　スティーブストン仏教会の位置

1868 年にハワイに移民した人々（元年者）を皮切りに、19 世紀末以降、数多くの日本人が新天地を求めて北南米に移民した。日本人のカナダへの移民の始まりは 1877 年（明治 10 年）に外国船に乗って脱船しカナダに定着した、永野万蔵と言われている。その頃バンクーバー周辺は、フレーザー河でのゴールドラッシュに続き、それまで未開の土地だった密林や森からの材木を使った製材所の設立などにより発展し、1886 年にはバンクーバー市と制定され、また大陸横断鉄道の到着やカナダ太平洋汽船（CPL）の入港も手伝って、急激な発展をとげている時だった。1881 年には 1,000 人足らずだった人口も、1891 年には 13,000 人、1901 年には 27,000 人、1911 年には 10 万人へと増加した。

日本からの移民者の数も 1901 年には 4,500 人にまで増えた。男性を中心とした一時的な滞在を目的とする移民者達は生活の基盤を日本からバンクーバーへ移し、家庭を築くことを目的とした移民生活を始めた。そのような背景の中、日系人コミュニティには日本語学校や仏教会などが設立された。

仏教会の結成は、1904 年に有志が集い西本願寺に開教使派遣を申請したことによる。1905 年には、エンプレスジャパン号で到着した佐々木千重師を開教師として迎え、日本仏教会の名のもとに、バンクーバーの地における仏教会の幕が開けられた（1909 年に B.C.州政府より公認された）。当時は、会堂などはなく、石川旅館という旅館に仏像を安置していたが、同志の募金活動により 1906 年にはアレキサンダー街に民家を購入し、そこを本拠地とするようになった。その後仏教会は発展し数も増え（スティブストン仏教会は 1928 年に設立）、日系人コミュニティの中心として機能するようになった。婦人会や青年会も誕生し、付属幼稚園や日本語学校の設立、カナダでの布教活動なども行なわれた。これはカナダ日系人コミュニティの創出の要である。

1941 年の日米開戦に伴い、カナダでも日本人と白人の間に亀裂が入った。1942 年 3 月には戦時下の政策として、日系人は散在政策を強制された。これは、家や土地、漁船など不動産を含む財産全てを放棄し、田畑や道路作りなどの強制労働を強いられる収容所や、カナダ遠隔地への強制移動を意味した。家族と離ればなれになる人々も数多かった。

戦時下での状況を、他の国へ移民した人々と比較すると、アメリカでは、強制移動も財産の没収や強制移動はあったが、財産の強制処分はなく、日系ブラジル人は強制移動も財産の没収もなかった。このように、カナダに移民した日系人の戦時中の体験は悲惨であり、そこには凄まじい喪失の物語がある。語りの中に出てくる戦争の様子を語る部分を以下に抜粋する。

（G1：ガイド、F2 F3：訪問者）

G1：ええ．で、ここにあの住んでる日系の方というのは:やっぱりあの::、第 2 次世界大戦のとき(.)あの::ま、ここの::土地から(.)離れ[なくては

F2：　　[°ええ°

G1：いけなくなり［まして、内陸の方に(.)キャンプの方に行かされたんですね

F3：　　[はい．はい．

G1：その(.)それと同時に自分の土地、家を失ってしまっ↓て:、まほとんど漁師の方［だったんですけども:

F3：［°ええ°

さらに、戦後は強制移動のためコミュニティはバラバラになってしまっており、また元の場所に戻ると言っても、土地も家も財産もない状態で解放された彼らには、戻っていく場所やものが何もなかったのである。移動させられた場所で新たな生活を始めたり、日本に帰った者も多かったが、ただその中には、西海岸へ戻って日系人コミュニティを再生させた人々もいた。以下、その部分を語るガイドの語りの抜粋である。

（G1：ガイド　F3：訪問者）

G1：それからま:5・6 年後、あの::戦争が終わった時点↓で、そこに住みついか方-方もいらっしゃいますけども戻られた方がほとんど↓で［でまた 1 からスタートしたという

F3：　　[°ふ::ん°（(訪問者たち全員頷く)）

G1：ええ. まその時に＞かなりの沢山の日本人の方も＜亡くなられまし↓て：まあ、こういった形でお墓を作っ゜たり．　ええ.゜

現在スティブストン仏教会においてガイドは、このようにカナダ日系人の創出、喪失、再生の歴史に触れながら、仏教会についての語りを行なっている。

図２　仏教会外観

図３　仏教会内部

データ分析と方法論

ここで扱うデータは、2011 年 7 月 25 日にカナダのバンクーバーにあるスティーブストン仏教会にて、職員の日系人女性（1 世）がガイドとして、日本人訪問者（M1、F1、F2、F3）を案内している様子をビデオカメラ 2 台を使用し撮影したものである。撮影時間は約 1.5 時間で、会話分析の手法を使ってトランスクライブした。

日系カナダ人をトピックとした研究は数多くあり、彼らの歴史や文化を扱った文献は日系カナダ人のバックグラウンドを知る上で貴重な資料となる。幾つかだけここで紹介すると、バンクーバーの歴史と社会をつづったもの（Takata 1983; Wakayama 1992; 倉田 1983）、和歌山県三尾村に焦点を当てたもの（蒲生 1962）、写真婚について書かれたもの（真壁 1983; Makabe 1995）、日系カナダ人のアイデンティティについて（Fukawa 2007; Morita 1988; 山田 2008）など多くのインタビューなどエスノグラフィー的研究もある（河原 2006）。

しかし、実際の日系カナダ人の語りについて、その語りがどのように語られているのか、その語りで何が行われているのか、といった会話分析の手法を使った日系カナダ人の研究の歴史はまだ浅い。この論文では、日系人ガイドと日本人訪問者の間で彼らがどのように会話を構築しているのか、会話分析の手法を使って紐解きたい。新たなアプローチを提案すべく、カナダ日系人研究コミュニティに貢献出来ればと考える。

ガイドの語り

まず、以下のケース（例１）を例としてあげながらどんな現象に焦点を置くのかを説明したい。例１）は、訪問者の 1 人 M1 がガイドに質問をし、ガイドがその質問に答えている場面である。トランスクリプトの中で：は言葉をのばして発話している部分、また［は発話の重なり、そして（1.0）は、1 秒間の間を示している。

例 1）

［Buddhist Temple：建築デザイン］

01　M1：このかたちになったのはいつぐらい（.）からですか？

02　G1：ここがたたれ-建ったのは 69 年くらいだと思います．その前のお写真が．ちょっとあちら［のほうにございますけれどまたあとでご覧になって頂ければ（と思いますが）

03　M1：　　［ああ.

04　G1：ええ

05　M1：昔は［日本のお寺のような.

06　G1：　　［ええ いや．（1.0）日本のお寺のような感じでもなかったんですよね：え：.

1 行目で、M1 はガイドに対して仏教会のかたちに関する質問をしている「このかたちになったのはいつぐらい（.）からですか」。それに

対して G1（2 行目）は、その質問には直接的には答えない「ここがたたれ建ったのは 69 年くらいだと思います」。M1 の質問の「いつ」という部分をうまく使って、かたちに関しては触れず、建築年をもってまず質問に答え、「その前のお写真がちょっとあちらのほうにございますけれどまたあとでご覧になって頂ければ（と思いますが）」と、仏教会のかたちに関しては結局説明をせず、後で自分で写真で確かめることが可能である、という情報提供をもって回答としている。M1 はその回答中に短く「ああ」（3 行目）と言った後に、ガイドの発話が終わったと思われる時点で更に質問をすることで、仏教会のかたちに関する情報を再度得ようとする「昔は日本のお寺のような」（5 行目）。これに対して、ガイドはその推測を否定する発話をする「ええいや（.）日本のお寺のような感じでもなかったんですよね:.」。

ここで注目したいのは、5 行目から 6 行目にかけて両話者がどのような言語的リソースを選んでいるのか、ということである。訪問者の M1 もガイドの G1 も「日本」という言葉を選んで使っている。M1 と G1 が比較対照を共有しているからこその、日系人ガイドの日本人訪問者への語りの構造なのではないかと考える。

訪問者が新しい、説明の必要なものに出会ったとき、ガイドが提供する情報をもとにその理解を深めるプロセスが踏まれる。そのプロセスがどのように訪問者とガイドの間で構築されるのか、という問いを更なるデータを見ながら以下で検証していく。

以下では、仏教会のホールのようなところにいた F1, F2, F3, M1, G1 が仏教会の内部へと入って行く場面である。

例 2）

［Buddhist Temple：お座布団］

13　F1：あ- これ（.）（(指差し)）これはもう日本のような° 日本の::°

14　G1：あ：-お座布団はみなさんが作ってくれて＞でこれ一応あの(.)これが聖典って言いまして↑まあ浄土真宗のあたるものですね.

15　F3：あ::

16　G1：え:え:でこれもあの(.)こっちが日本語版なんですけども(.)

17　F3：え:

18　G1：こちらが英語で全部訳されてます

19　F3：あ［:　すご:［い.（じゃあ
　　この　　）［へ::::

20　M1：　［あ::

21　G1：　　［え:. でローマ字で全部［あの:お経も唱えられるように（.）全部ローマ字で

仏教会という、はっきりとしない新しい空間に入ったときに視界に入ったものの中から、F1 が会話のアイテムとして選んだのが、既に F2 が見ていた「お座布団」である。この時ガイドは後ろからついて来ており（図 4 参照）、F1 の視界にはおらず、F1 は「これはもう日本のような日本の」と言いながらゆっくり仏教会の中へ進んで行く（13 行目）。F1 が「あ-これ」とベンチの上の座布団を指差し（アンダーラインは強調されていることを示している）、「気づき」の表示をした時には、ガイドの説明は始まらない。F1 は立ち止まらずそのまま歩いて行く。ガイドは「あ-お座布団はみなさんが作ってくれて」（14 行目）と F1 の発話に答えるが、この時の身体動作としては、座布団ではなく経典を取り上げている（図 4 参照）。そして間をおくことなく、「でこれ一応あの（.）これが経典って言いまして」と経典の説明を始める（14 行目）。

この場面では、ガイドは訪問者が気がついた

仏教会を理解する鍵となりえるアイテム（座布団）に言及することでガイドとしての語りを始めるが、身体行動を見ても明らかなように、実際は座布団の話ではなく経典の説明をするターンとなっている。つまりここでは、訪問者とガイドの間で何が説明されるべきかということについてのネゴシエーションが起こっている。

図４　ガイドが「でこれ一応」という場面

ガイドにはどんなガイドツアーをするのか、というアジェンダがあり（Drew and Heritage 1992; Heritage 2004; Roberts 1997）、どのような語りの中で説明するのか（Sacks 1974, 1978）、また、日本と日系文化の比較対照する、という語りの構造の中でも、何を優先するのか、という緊張は常にあるだろう。何をもって比較対照物とするかは、訪問者からの奔放な質問やその場で起こる偶発的な会話の中で、その場その場で決まっていく。そのネゴシエーションがどのように始まり、どのようなプロセスを踏んで収束するのかを見る事で、ガイドが何をもって日本と日系文化の境界線を引こうとしているのかを見極める１つのきっかけになるのではないだろうか。

例えば、この例２の場面では、仏教会の中のベンチの脇を全員が歩いていて、まず座布団に注意が向けられたことから、座布団にガイドは言及するが、同じスペース内にある経典を取り上げる事は不自然ではない。むしろ、まず座布団に言及したことで、訪問者の質問にも答えているのでガイドの活動としてはスムーズに経典への話へとつなげることが出来ている。「あ：－お座布団はみなさんが作ってくれて＞でこれ一応あの(.)これが聖典って言いまして↑まあ浄土真宗のあたるものですね。」（14 行目）、という発話で、＞のマークは、「でこれ」という部分がまわりの発話より速いテンポで言われたことを示しており、間があいていないことがわかる。「でこれ一応あの」と言った時には経典を取り上げており、訪問者たちの注目は既に経典に移っている。ガイドはそこで初めて、(.)マイクロポーズ（0.1 秒ほどの間）を取っている。つまり、座布団のトピックから経典のトピックへの変換において、ガイドは訪問者たちに話者としてのターンの移行のチャンスを与えていない。

さらに座布団を話題として取りあげず、経典に訪問者の注意を喚起し実際に経典の中身を見せることで、英訳版もあること、全てローマ字であること、を示す事が可能になり言葉を鍵に日本と日系文化の境界線を引くことに成功している場面である。日本語で書いてある経典と日本語がローマ字で書いてあるもの、さらには英訳されているものがある点を対照物として選んでいるのである。これにより、それぞれの文化圏での言葉の違い、単なる日本語と英語の違いだけでない日系文化ならではの仏教会の姿が浮き彫りになっている。

注目したいのは、語りの中で日本文化との境界線の線引きはまず、訪問者の一人である、F1 が座布団という言葉は言わずに、「日本のような日本の：：：」（13 行目）、と日本を基準値にして、日本との共通点で仏教会に関する質問をすることから始まっている。日本のような「何か」、という部分が欠落しているにも関わらず、ガイド

も質問の明確化のリクエストなど、相互行為的に問題があるというような表示はせず、誰が作ったのか、という答え方をする。座布団＝日本の物という認識の共有があるからこそ、仏教会を使う日系の「みなさん」が作っている、という答えられるのではないか。語りの構造としての日本と日系文化の対照がここでも見られる。

次の例でも、ガイドと訪問者のオルガンというトピックを使って、日本と日系文化の線引きがガイドと訪問者間の相互行為のコンティンジェンシーの中で行われている。例 3 は、前で話されていたトピックが終わりに近づき、F3（54 行目）と F2（55 行目）が質問をして次のトピックへ移る場目である。ガイドは F2 のオルガンに関する質問に対し説明を行う。

例 3)

［Buddhist Temple：オルガン 2:11］

51 G1：ほ：んと、日本の文化をこ［う伝えられてきたまま

52 F3：　　［へえ：ええ、あそうですか

53 G1：ええ、ええ

54 F3：この（　　）

55 F2：すみません．あそこに［：ピアノというか＝

56 G1：　　［ええ

57 F2：＝オルガンというかがあるんですけど［それは鳴るんですか

58 G1：　［これはですね、
ええ（(かがんで経典を取り上げる)）
いちおうですね、あの：一番最初にここに作って（(経典をめくって見せる)）

59 いた［だいた：歌が．歌があるんですよ．

60 F3：　［なんか歌が？

61 F2：あ:::

62 F2：こちらはみなさん［讃美歌みたいな感じで［歌われ（　）

63 G1：　［え　［ま、まあそうですね:

64 G1：花祭りの歌とか:

65 F2：［あ:::

66 F3：［あ:::

67 G1：え:. いろい［ろと

68 F2：　［それって伴奏用なんですか？

69 G1：そうですね.

70 F1：゜ふ:::ん゜

71 F3：゜へ:::゜

72 G1：え:え:みなさん゜使って゜-ま(.)ほんとあの::教会みたいな感じですよね::

73 F1：［ふ::ん

74 F3：［ふ:::ん

F2 はオルガンというお寺には異質と思われるアイテムに気がつき、「それは鳴るんですか」と質問をする（57 行目）。この質問の回答は 68 行目の F2 の質問「それって伴奏用なんですか」とそれに対する G1 の答え「そうですね」によってこのトピックは終わりに向かう。以下ではこの間のガイドと訪問者たちとの相互行為を細かく検証していきたい。

ガイドの G1 は F2 の質問「すみません。あそこにピアノというかオルガンというかがあるんですけど」（55 行目）という、質問のかたちは取っているものの、実際の質問はまだ発せられていない時点で「これはですね、ええ、」（58 行目）と、説明を始める。ここでの G1 の身体行動を見てみると、少し前に説明を行った経典を、それぞれのベンチの前に取り付けられている棚から再度取り上げている。そして「いちお

うですね、あの：一番最初にここに作っていただいた」と言いながら経典のページを開いて訪問者たちに見せる。F3 は、この時点で「何か歌が」（60 行目）と G1 の説明の続きを予期して質問をする。タイミングを同じくして G1 は「歌が。歌があるんですよ」と発話を終える。

ここでは、オルガンの存在の説明としてガイドが経典を開いたことから、F3 は歌、F2 は賛美歌というキーワードをあげる。オルガンの説明としてなぜ経典が開かれたのかという彼らの理解を、教会では聖書を見ながら賛美歌を歌うのではないか、ということと比較しながら示している。これに対してガイドは、「まあそうですね」、とこの時点では完全な同意を示さない。Pomerantz（1984）が、まあ、などの言葉が同意についた場合非同意を含意しうることを指摘しているが、実際ガイドは「花祭りの歌とか」と続け、F2 が提示した賛美歌という言葉を修復する。

その後で、F2 が「それって伴奏用なんですか」（68 行目）という、55 行目で「すみません。あそこにピアノというかオルガンというかがあるんですけど」という質問をさらに具体化した内容をもって質問をすると、ガイドは「そうですね」（69 行目）と同意するかたちで回答をする。さらに「え:え:みなさん゜使って゜-ま(.)ほんとあの::教会みたいな感じですよね::」（72 行目）、と教会との類似に言及する。

先ほどの例 2 にもあったように、ここでもある対象物（オルガン）を仏教会という文脈の中でどのように説明されるのか、というネゴシエーションが訪問者とガイドの間で起こっている。一方で訪問者がオルガンから賛美歌、とキーワードを単純につなげるが、もう一方ではガイドが大変注意深くそのつながりを説明する。

ガイドは、教会の賛美歌のような感じにみなさんオルガンと一緒に歌うんですよ、というような単純な説明ではなく、まず全て英訳されている経典の中を見せて、賛美歌という言葉には非同意を表し、花祭りの歌という日本の歌曲を例にあげる、というプロセスを踏み、そこまでの理解を訪問者が示した上ではじめて、教会との類似を認めている。

仏教会というお寺と教会の融合が行われた場所の説明は、ガイドによって日本のお寺に言及する部分と教会に言及する部分に関して大変注意深く語られている場面である。どこまでが日本文化なのか、どこまでが日系文化なのかガイドと訪問者が共同で線引きを行っており、そのプロセスの中で訪問者の仏教会のあり方がより深く理解されている。

次の例は、例 3 からの続きで、再び仏教会の理解へのプロセスにおいてガイドと訪問者が共同作業で何をもって仏教会とするのかという線引きを行っている。76 行目からは、F3 はビデオからは姿を消し、F1、F2、G1 の 3 人が話している。↓↑はイントネーションの上がり下がり、また゜゜は声が小さくなったことを示す。

例 4）

［Buddhist Temple：風習］

72　G1：え:え:みなさん゜使って゜-ま(.)ほんとあの::教会みたいな感じですよね::

73　F1：　［ふ::ん

74　F3：　［ふ:::ん

75　G1：ちょっと、え:風習がちょっと違う

76　F2：日本のお寺より゜すごい゜参加するっていう感じじゃ＞［ありません？＜、

77　G1：　［そうです↓ね:::::

78　F2：参加するってイベントないじゃないですか

79　G1：あ、ないですか:？
80　F2：そうですよね？　((F1を見ながら))
　　あんまり:なんか［ただ゜き゜聞くっていう↓かお坊さんの＝
81　F1：　　［ね：あんまりないですよね。
82　F2：う:::ん（((考えるポーズ))
　　＝説教、［説法を聞く（くにの　　）
83　F1：なので：
84　G1：　　［↓ん::
85　F2：そうですね
86　G1：（ということで：）
　　ま、それは毎週日曜日(.)
　　え:、あの:10 時半からやられてるんですけど↓も:

オルガンがどのように使われているのか、という説明をした後ガイドは、訪問者の理解（73行目、74行目）が示されると「ちょっと、え：風習がちょっと違う」（75行目）と、そこまでの話を要約する。その一般化された要約「風習がちょっと違う」に対して、F2は「日本のお寺よりすごい参加するっていう感じじゃありません？」（76行目）と、再び日本との比較に戻る発言をする。

そして、「参加するイベントってないじゃないですか」という同意を求める質問に対してガイドは、「あ、ないですか：」とその点に関しては前知識がない、という回答をする。つまりここでは日本のお寺に関する知識が共有されておらず、お寺と仏教会の線引きのプロセスにおいて、F2とF1、またガイドの間での、お互いの知識を確認する作業が入っている。

80行目以降F2が日本のお寺での一般的な活動を説明し始める。しかし、F2の文末は付加疑問文が使われたり「イベントってないじゃないですか？」（78行目）、疑問文の形をとっていたり「そうですよね？」（80行目）、はっきり文法的にセンテンスを終わらせておらず、「説法を聞く（くにの　　）なので：」（82行目：括弧内ははっきり聞き取れない部分）明言はしていない。一方的な情報提供ではなく、あくまでも自分と一緒にいるF1とガイドとの確認作業を通しての知識の共有が行われている。81行目でF1が「あんまりないですよね」と同意し、84行目で「そうですね」とガイドが理解を示すことで、日本のお寺での活動に関しての知識が共有されたことがわかる。

ガイドと訪問者が知識の確認をとる作業はこの後にもおこる。以下は、例4のすぐ後の会話で、F3がまたビデオ画像に入ってきている。

例5)
［Buddhist Temple：初参り］
87　G1：その他にま結婚式(.)え::
　　お葬式はもちろんのこと(.)ここであと　　［あの::
88　F3：　　［（((頷く))
89　G1：え:::::初参り［と言いまして
90　F3：　　［あ（((頷く))
91　G1：こどもの［ええ、((頷く))
92　F3：　　［あ、はい（((頷く))
93　F2：　　［あ、はい（((頷く))
94　G1：゜すっごい゜たくさんみなさんいらっ連れてきて

ここでは、89行目のガイドによる「初参り」という古くからある日本の風習に関する言葉が説明に出る。ガイドは仏教会の使用目的の例をリストアップしているが、結婚式、お葬式に続く部分でかなり言いよどんでいることがわかる。87行目から89行目「あの::え:::::」そしてようやく発せられたのが「初参りと言いまして」だが、かなり早い時点で、F3は「あ」と言いな

がら頷き（90 行目）、知識が共有されていることを示す（Heritage 1998）。Stivers（2008）は、物語が語られている時、語りの途中で起こる頷きやミニマムな mm hm, uh huh, yeah などのトークンは、語りという活動に対する “aligning” を示す、と言っているが、ここでも訪問者が “align” する様子がうかがえる。90 行目の時点でF1とF2からは同様の表示はなく、ガイドは、「こどもの」（91 行目）と初参り自体の説明を始めようとするが、そこではすぐに F1 と F2 の「あ、はい」という頷きと明確な理解の表示があり、初参りが何なのかがその場にいる全員で共有されている。その手続きが済んでから、ガイドは初参りがどのように仏教会で行われるのかという説明に入る。

次の例 6 と例 7 は、はっきりとした比較対照を出す事によって、ガイドが説明のまとめを行う場面だが、会話の構造のみならず、文の構造を使ってガイドと訪問者との共同作業としての理解がなされている場面でもある。

例 6）（例 2 の続き）

［Buddhist Temple：盆踊り］

35　G1：この間お盆だったんです［けどもだいたいあの 300 名くらい(.)

36　F1：　　［へ:::

37　F3：［はい、はい。うん

38　G1：［いらっしゃって。ええ。

39　F1：［そうなんですか:

40　G1：こちらのお庭で((庭のほうに左手を向ける))盆踊りもやったり［して

41　F3：　　［あ-

42　M1：　　［あ:::

43　F1：(そうですか:)

44　G1：え:、え:.

45　F3：へ:::

46　G1：まる(.)で日本と同じです。まったく

47　M1：うん

48　G1：え:↓え:↓逆に日本にいらっしゃる方より↓も:［日本人.

49　F3：［°はい°

50　F1：［熱心ですよね．え::

51　G1：ほ:んと、日本の文化をこ［う伝えられてきたまま

52　F3：　［へえ:ええ、

53　G1：あ、そうですかええ、ええ

例 6 は例 2 の続きで、ガイドは英訳された経典の話をした後にここでは、盆踊りについて説明している。注目したいのは、46 行目にガイドが盆踊りの説明のいわばまとめとして「まる(.)で日本と同じです。まったく」と明確な類似比較をし、さらに 48 行目では、「え:↓え:↓逆に日本にいらっしゃる方よりも:日本人」と、日系人＝日本人よりも日本人という関係性にいきつく。

ところが、F1 はガイドの「逆に日本にいらっしゃる方よりも:」の述語として「熱心ですよね。」という表現をする。この発話は、ガイドが「日本人」と言うのと同時にされており、それぞれの日系人へのイメージが語られ、かたち作られている。日本語の文構成が可能にする会話の 1 つの順番（ターン）を超えた部分でのコラボレーションである（Couper-Kuhlen and Ono 2007）。

次の例 7 でもガイドははっきりとした日本との比較をしながら日系文化を語ることでそれまでの語りのまとめとしている。最終的なまとめがどのように行われているのかに注目したい。

例 7）（例 5 の続き）

［Buddhist Temple：神社］

95　F3：じゃあ神社じゃなくて［:初参り［はここで

96　G1：　［え　　［はお寺さんです。神社はない［ので:↓え:

97　F3：　　［へえ::

98　G1：↓え:↓え: 初参り。↓え:

99　F2：°初参りはこちらで°

100 G1：そうです↑ね:ですから日本の方よりも(.)逆に(.)

101 F2：親しみもって［ますよね

102 G1：　　［え:↓え.はるか［に

103 F2：　　［生活の一部に

104 G1：入ってます。はるかには:い.　はるかに入ってます.

95 行目で、F3 は「初参り」の説明に対し神社に言及する事で、日本で一般的に行われている初参りとの比較を行うことにより、日系人文化の理解の 1 つのプロセスとしている。そして、日本人の方よりも逆に親しみをもってますよね、というターンの後に付け足すかたちで（increment)、ガイドが「はるかに」とさらに続けると（102 行目)、「生活の一部に」、と F2 が続け（103 行目)、最終的に「入ってます」とガイドが締めくくる（104 行目)。まさに共同作業を通してのまとめが行われている。

例 6 と例 7 では、ガイドのまとめ部分の発話のデザインが、述語部分の前で区切っていることから、訪問者が述語部分を補って完全なセンテンスにすることが可能となっている。ターンデザインの視点から見ても、共同作業が行われていることが観察できた。

まとめ

今回のデータ分析は、バンクーバーのスティーブストン仏教会において、日系人のガイドが日本人に対してどのように日系文化を語るのか、ということを焦点にし、仏教会やカナダ日系文化の理解が日本を基準として行われているのではないか、という暫定的な観察を行った。日本文化はこれ、日系文化はこれ、という文化の確固たる定義がなく、はっきりとした線引きが難しい日本文化と日系文化の融合の境界は（図 5 参照)、ガイドという知識を持つ者から知識を持たない訪問者へと一方的に引くものではなく、訪問者との一瞬一瞬の相互行為の現場の中で築かれていた。

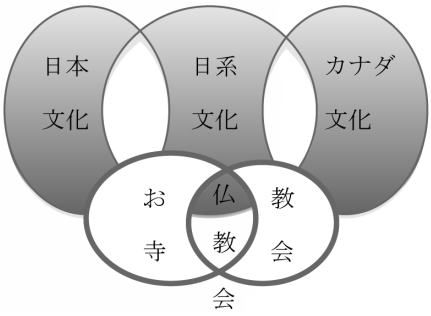

図５　文化融合のイメージ図

1 つには、図 6 にまとめたような、キーワードの対照が会話の基本構造としてセットで用いられることで日本文化と日系文化の境界線が引かれていた。日本と類似しているか、差異があるか、に言及し日本を基準点とし、ガイドも訪問者も、その基準点を共有することで、日系文化に対する理解を深めているプロセスが見えてきた。

またガイドにはガイドとしての何をどのように説明するのかというアジェンダがあり、訪問者には訪問者なりの理解の中で、何を説明してもらいたいか、というリクエストがあり、説明の現場ではそのネゴシエーションがうまく消化されている。そういうネゴシエーションの中で

鍵になっているのが、日本に関係するものとの比較や類似点を共有するという作業で、話題のシフトも、お互いの知識を共有し、共有できたことを確認してから行われている。

日本	日系コミュニティ
お寺	仏教会
聖典日本語	聖典英語
盆踊り	盆踊り（生活密着）
花祭りの歌	賛美歌
説教：まれ	説教：毎日曜日
聞くだけ	参加型
寺：限定使用	寺：身近
お葬式	初参り、結婚式
親しみ薄い	親しみ深い
お墓	納骨堂
法事少ない	法事多い
結婚式：神社	結婚式：お寺
着物	洋服

図６　会話の基本的構造においてセットで用いられている対照キーワード

さらに対照キーワードを使った会話の構造のみならず、日本語の文の構造も使ったガイドの語りのデザインにより、訪問者の日系文化に対する推測も可能になっていた。双方の共同作業による理解の場が作られており、これは訪問者の積極的な参加を促し、仏教会訪問という活動全体の質を高めている（*cf:* Goodwin 1984)。

今後はこの分析の比較として、日系人のガイドが日本人でない訪問者に対して英語で日系文化を伝える時、そこにはどんな類似点や差異が出るのか、を観察したい。日系文化を日本人に語る時には、日本との比較という会話の構造が使われたが、これは、結果的に日本文化を共有している人、という日本人なり日系人なりのアイデンティティが示されている現場として捉えることも出来る。共有概念の少ない文化を背景とした訪問者への語りはどうなされるのだろうか。さらには、カナダ日系人の歴史が語られる時、そこにはどんな会話構造があるのか、という分析も含め今後の課題としたい。

謝　辞

この研究は、埼玉大学教養学部山崎敬一教授のプロジェクトの１つであり、山崎教授からは大変貴重な助言を頂いた。また、ここで扱った、カナダ調査で撮影されたビデオデータやトランスクライブされたデータは山崎教授の研究室に属するものであり、データの使用許可を頂けたことも含め深く感謝したい。

文　献

Ayukawa Midge Michiko (1995), “Good Wives and Wise Mothers: Japanese Picture Brides in Early Twentieth-Century British Columbia” In *BC Studies* 105/106, *Women's History and Gender Studies* (Spring/Summer 1995): 103-18

Couper-Kuhlen Elizabeth and Ono Tsuyoshi (2007), “Turn continuation in cross-linguistic perspective”, Special issue, Journal of Pragmatics 17 (4): 513-552

Drew Paul and Heritage John (1992) *Talk at Work*, CUP: Cambridge

Fukawa Masako (2007) *Nikkei Fishermen on the BC Coast: Their Biographies and photographs- Nikkei Fishermen's project-*, (ed), Harbour Publishing: B.C

Goodwin Charles (1984) "Notes on Story Structure and the Organization of Participation." In *Structures of Social Action*, Max Atkinson and John Heritage (eds), CUP: Cambridge: 225-46

Harding John S, Sogen Hori Victor, and Soucy Alexander (2010), Wild Geese: Buddhism in Canada, McGill-Queen's University Press: Montreal

Heritage John (1998) “Oh-prefaced responses to inquiry”, *Language in Society*, 27: 291-334

Heritage John (2004) “Conversation Analysis and Institutional Talk”, In Robert Sanders and Kristine

Fitch (eds), *Handbook of Language and Social Interaction*. Mahwah NJ, Erlbaum: 103-146

Makabe Tomoko (1995) *Picture Brides: Japanese Women in Canada*, Multicultural History Society of Ontario

Morita Katsuyoshi (1988) *Powell Street Monogatari*, translated by Eric A. Sokugawa, Live Canada Publishing Ltd.: B.C

Pomerantz Anita (1984) "Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/ dispreferred turn shapes, In: Atkinson, M. and Heritage, J. (eds) *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, CUP: Cambridge: 57-101

Roberts Lisa (1997). *From Knowledge to Narrative: Educators and the Changing Museum*, Smithsonian Institution Press: Washington D.C.

Sacks Harvey (1974) "An Analysis of the Cource of a Joke's telling in Conversation", In R. Bauman and J. F. Sherzer (eds), *Explorations in the Ethnography of Speaking*, CUP: Cambridge: 337-353

Sacks Harvey (1978) "Some Technical Considerations of a Dirty Joke", In J. Schenkein (ed), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, Academic Press: NY: 249-269

Stivers Tanya (2008) "Stance, alignment, and affiliation during storytelling: When nodding is a token of affiliation", *Research on Language & Social Interaction*, 41: 31-57

Takata Toyo (1983) *Nikkei Legacy The Story of Japanese Canadians from Settlement to Today*, NC Press Ltd: Toronto

Wakayama Tamio (1992) *Kikyo Coming Home to Powell Street*, Harbour Publishing: Kobe

生田真成（1981）「カナダ仏教会沿革史」、カナダ仏教教団

河原典史（2006）「日系カナダ移民のライフヒストリーをめぐる調査法の再考—実証的な生業研究にむけて」立命館言語文化研究紀要 特集 1、17 (4): 3-20

蒲生正男編（1962）「海を渡った日本の村」中央公論社

倉田和四生（1983）「カナダにおける日系人社会の構造と変化」、関西学院大学社会学部紀要第 47 号

バンクーバー日本語学校並びに日系人会館（2006）「百年の思い出」

真壁知子（1983）「写真婚の妻たち：カナダ移民の女性史」、未来社

宮田登（1988）「日系移民の民族文化」、綾部恒雄編「カナダ民族文化の研究–多文化主義とエスニシティ–」、刀水書房

山田千香子（2008）「カナダ日系社会の文化変容：「海を渡った日本の村」三世代の変遷」、お茶の水書房

スティーブストン仏教会 Home Page
http://www.steveston-temple.ca/